

からくり人形の世界



茶くみ人形（『ものと人間の文化史 からくり』より）

目 次

はじめに
からくりとは？
からくりの歴史
山車からくり
座敷からくり
竹田近江・出雲
からくりの書
からくりの数々
おわりに
参考文献一覧

はじめに

私が始めてからくり人形を見たのは、四年前の冬であった。大阪のデパートで行われていたからくり人形展にたまたま入った私は、そこで繰り広げられているからくり人形たちの世界に、あつという間にすっかり魅了されてしまった。からくり人形は現代の機械おもちゃとはちがひ、動きがどこかぎこちなく、また不正確で、そのぎこちなさの中に愛らしさがあり、そして不正確さのおかげで見ていて飽きがこないのだった。

中でも最も私を魅了したのは「弓曳童子」という人形であった。人形が独り独りで矢立から矢を取り、弓につがえ、そして狙って、射る。という動作を行うだけでも驚きであるが、この人形のすごいところはもっと別のところにあった。弓曳童子は、ただ一連の動作をし続けるというのではなく、矢を的に当て損ねたりもするのである。そして不思議なことに、矢が当たったときはうれしさが、外れたときには悔しさの表情が、見事に、そして確実に伝わってくるのである。

そんな不思議なからくり人形の世界を、これから紹介していきたい。

このレポートの章立ては、次の「からくりとは？」の章でからくりを種類分けをし、各種類それぞれについて、以下の章で説明をしていくようにした。からくりにも様々あるが、それらからくりの魅力が少しでも伝わることを、目的としている。

からくりとは？

まず、からくりという言葉だが、江戸時代のいろいろな書物、ちらしに出てくるからくりには、カラクリ、カラクリ、絡繰、操、唐繰、機関、機巧、巧機、機、旋機、機振、関振、関鍵、器械など多くの文字が当てられている。さらに、のぞきからくりや水からくりといった物や、エレキテル時計、ポンプなどもからくりとして見せ物や売り物になっていたと記録にある。科学的、技術的な理屈はともかく何らかの機構を持って動く物や、種々の工夫を凝らした物など、一般の人々にとってとにかく常識を越えたものがからくりとして捉えられていたのである。それらのからくりは大きく次の3種類に分けることができる。

(1) 祭礼・祭事のために作られたからくり

代表的なものとして、台車、山車からくりなどと呼ばれるものがあり、室町期に完成された京都昇山の浮動の立居人形を祖として、その後人形等に動きを仕込んだものが各地に広まった。現存するものも比較的多い。山車からくりはほとんどが糸によって人間がからくりを操るものであり、技を競ってカラクリを巧妙にし、自動人形を目指すことはなかった。それよりもカラクリ人形そのものの伝統を譲り伝えることの方が重要であったと思われる。

(2) おもに個人を対象に作られたからくり

このタイプの代表である台付きの座敷きからくりは平安時代に、貴族の人形飾りの風習から始まって、その後一般にも広まり、貴族や豪商などのご祝儀の進物として用いられるようになったものである。これらのからくりは台の横にハンドルが付いており、それを回すと台上の人形などの中に仕込まれた糸が、カム、滑車などによって引かれ、いろいろな動きをする。商品として製作され売られていた台付からくり人形は、個人の所有として大事にされ今に残されるものが多い。

(3) 芝居などの一般大衆への見世物として作られたからくり

竹田からくり芝居のようにからくり自体を見世物としたものや、人形浄瑠璃の人形仕掛けや歌舞伎舞台のように、舞台演出における巧妙な仕掛けとして使われたものがある。常時使用されるため当時のもので現存するものは少ない。特にからくり芝居においては、商品価値のなくなった時点で処分され、保存されない場合が多い。

また、大衆芸能である見世物というのは、「寺社の祭礼、開帳、縁日などにその境域で臨時に小屋掛けをし、土地の盛り場に常設の場所を占め、入場料をとって種々の珍奇なものや、曲芸、奇術等を見せる興行物」のことであり、

- ・ 奇術（手品）、軽業、曲独楽、曲芸、力曲持、舞踏、武術、などの技術や芸能を見せるもの。
- ・ 畸人、珍禽獣、異虫魚、奇草木石などの天然珍奇なものを見せるもの。
- ・ 練物や張抜きの人形、からくり装置、ガラス細工、籠細工、貝細工、菊細工、そのほかの細工物などを見せるもの。

と大別される。江戸当時、からくり・からくり芝居は見世物の一つ、芸能であった。

そして、その仕組みや構造から、

- ・ 内部に機関を持ち、原動力としては、弾性ばね（鋼、真鍮、鯨口ひげ、竹、杉皮等）水、砂、空気、水銀などによって人形を動かすもの。
- ・ 原動力としては、人力、水力により、糸や串を手などで操作し、仕掛けを動かすことなく、さながら機関で動くように見せるもの。

と、からくりを分類することができる。

現在でも使用されている江戸時代のからくり技術として、人形浄瑠璃（文楽）や歌舞伎の舞台技術がある。

からくりの歴史

からくり人形は江戸期に日本人が独自に発展させた文化である。とはいえ、江戸期以前にもからくり人形の文化は存在した。

そのもとは、我が国の文化の大方がそうであるように、中国をルーツとする。『日本書紀』には、斉明天皇4年（658年）に唐から帰化した智諭という僧が指南車を作ったことが記されている。指南車は中国の皇帝が作り出したという伝説があり、車に乗せた人形が常に南に指したために方角を誤ることがなく、霧を利用して攻めてくる蚩尤しゅうゆうを用いて破ったとされる。伝によれば、指南車は宋代においては、単なる方位を示すからくりだけでなく、歯車の組み合わせによって一定の動きをする機構が組み込まれていたという。

この他、『三国志演義』での諸葛孔明が、木牛流馬なるからくりを用いた運搬機械を作り出し、魏との戦争に大いに用いた話が日本では知られている。もともと中国の時計技術は最先端にあり、暦を作る天文観具等が日本に古くから入ってきており、その機構を利用したからくりも同様に入ってきていた。

こうした影響を受け、日本の説話集『今昔物語』にもからくりに関する話が登場する。

高陽親王かやうのみことが干ばつ時に自動人形を造りだし、田の水枯れを防いだという話である。親王が造りだした自動人形は大きき四尺ほど。左右の手に器を持ち、これに水を入れると自動的に動きだし、田に器の水を入れた。このために田におのずと水がたまり、田は自然と潤ったと

いう。

この話自体は、中国の話をもとに作られた物であるというのが現在の有力な説であるが、ともかく平安期には、からくり人形という概念は一般的に浸透していたことは事実である。

もともと日本には人形を使った芸能が古くから行われている。「くぐつ」と呼ばれるあやつり人形は一種の宗教行事であり、神事に深く関係する。こうした芸能の中で人形の見せ物は発展し、中にはからくり仕掛けを見せる物も現れ始める。室町期の日記『看聞日記』には、金を打って舞うからくり仕掛けの人形や、鶴や亀が動くからくり人形に関する記載がみられる。また、寛文四年に没した江村専斎の雑談を集めた『老人雑話』には、豊臣秀頼に送られた、金を箱に入れると人形が転倒するからくり人形に関する話もみられる。江戸期に一気に花咲いたかに見えるからくり文化であるが、平安よりその歴史は連面とつづいていたのである。

室町時代後期、西洋人が日本にやってくるようになった。彼らによって伝えられた技術や文化は日本を大きく変えた。そして江戸期に入ると日本は鎖国し、彼らを事実上しめ出した。以降、日本はうちにこもり、文化を独自に発展させていく。からくり人形もその一つであり、その内部機構は西洋時計のメカニズムを参考に作られている。元禄の時代には井原西鶴が茶運び人形を見て「茶をもてる 人形の車 はたらきて」という俳句も詠んでいる。

こうしたからくり人形は、個人の遊興物として作られた他、見世物や祭礼、神事の道具としても用いられた。

江戸期のからくり人形はまず、からくり見世物の主役として発展した。からくり見世物は江戸中期から多くの人を集めるようになり、大坂では竹田近江、江戸では松田播磨接がとくに高名だった。竹田近江は本名清房といい、からくり人形を禁中に献じ、出雲目、近江少掾を受領した。寛文2年（1662）、大坂道頓堀に竹田芝居を創立し、浪花名物となった。

初代竹田近江の息子は二代竹田近江を継いだ、その弟が元祖、竹田出雲である。出雲は竹本座の座元にもなり、人形浄瑠璃の発展に貢献した。これは現在、文楽として引き継がれている。この竹田からくりはいい意味で見世物であり、純粹なからくり仕掛けだけを見せるのではなく、まやかしも見せたといわれている。糸や串などを人力で陰ながら操作し、あたかもからくりで動いているように見せかけた物もいくつか混じっていた。

竹本座の二代目竹田出雲、竹田座の三代目竹田出雲までは隆盛を極めたからくり見世物だが、以降は人間の芸を見せる歌舞伎に人気の座を取って代わられ、その後は衰退の一路を辿ることになる。

からくり人形芝居は衰退していったが、からくり文化が消えたわけではなかった。からくり人形はこの後、個人の玩具として発展していったほか、祭礼・神事の花形の役割を担うようになる。しかし面白いことに、江戸時代の人はこちらのからくりを鑑賞することで満足し、実用の生産技術と結びつけなかった。明治に入ってから、その技術と知識の豊かさを基に、田中久重（からくり儀右衛門）を代表とするからくり師たちが、西洋から輸入された電信機や蒸気機関、大砲を自分のものにしていくのである。

山車からくり

現在、からくり人形を乗せた山車の祭りとして有名なものに、飛騨高山の高山祭りがある。高山祭りは、祇園・秩父と共に日本三大祭りとして名高く、毎年多くの観光客をひきつける。祭りの中心は、24 台の豪華絢爛たる山車であり、中でもからくり人形を乗せた3台のからくり屋台の人气が高い。

高山のからくり屋台は人が綱を使ってあやつる仕掛けになっており、純粋な機械仕掛けではない。しかし、その仕掛けは大がかりなもので、「布袋台」と呼ばれるものなどは、実に全部で三十六条の綱を使い8人の綱方で操る。この「布袋台」は、背丈七四センチの布袋と45センチの男女の唐子がからむ仕掛けで、数個に連なるブランコ方の枠に、2体の唐子人形が次々にぶらさがって飛び伝い、はなれた場所にいる布袋の肩や右手に飛びついてたむむれる。人形たちの動きは非常に複雑で、操演するには相当の熟練を要す。まさにからくりを介した名人芸の世界である。

山車からくりは、もともとは名古屋祭りが元祖的な存在である。名古屋には元来優れた和時計作りの系譜があった。尾張藩初代藩主徳川義直の名古屋入りの際、江戸より津田助佐衛門という時計技術者がつきしたが、以後、尾張藩の時計御用をつとめた。この時計づくりの技術と竹田からくりの技術が融合し、名古屋独特のからくり人形技術が生まれる。このからくり人形の技術は祭りの山車に利用され、祭りで民衆の喝采を浴びる。元来が裕福な土地で、派手な祭りごとが好きで名古屋では、この山車からくりが祭りの花形になっていくのである。人形師初代玉屋庄兵衛のとき急速に技術は向上し、「綾渡り唐子人形」「乱杭渡り人形」「三番雙人形」「布袋踊人形」など、それぞれ独自の動きを作り出した。

名古屋祭りのからくり山車で記録に残っているものに「石橋車」「小鍛冶車」「布袋車」「西王母車」「唐子車」などがある。このうち「小鍛冶車」と「唐子車」は竹田近江の作。「布袋車」「福祿車」「西王母車」は、近江より六十年ほど下った時代の竹田寿三郎の作である。「布袋車」には文字を書くからくり人形が搭載され、この人形に関しては、滝沢馬琴も紀行文で物珍しげに著述している。

こうした伝統を受けて、尾張地方は現在もからくり人形の宝庫として知られている。現在もからくり人形師である玉屋一門がからくり人形の製作と修理にあたり、現存するからくり人形も六百体を越えるという。このように、からくり人形は、今なお尾張の町に息づき、多くの人々に親しまれている。

座敷からくり

京で生まれた座敷からくり人形は、人が内部で這い蹲って操作する山車からくりとはまったく異なり、科学技術により動き出すのが特徴である。

座敷からくり人形は、江戸中期頃、衣装人形の手を動かしてもてあそんだものが始まりだと言われている。その後、張子で作られた御所人形の手を動かしたり、持ち物を動かすような簡単な動作から、複雑な使用になっていった。これは、人形師の工房と天文具師や器物師（和時計を作る人）などの、工房同士の技術交流によって生まれた。人形師は、張子の技術を用いて天球儀・地球儀を作り、器物師から時計の歯車の技術を教示されて、その応用で横廻りする人形などを開発する手がかりを得た。

寛政8年（1796）刊行の細川半蔵著『機巧図彙』によると、当時には水銀を用いた童子の

「五段返り」や二人の童子による「連理からくり」、鯨の髭をゼンマイにした「茶運び人形」などが出現している。そして、寛政年間（1789～1801）に存在している座敷からくり人形には、「鬮鶏」や「品玉人形」があると記されている。

からくり人形に使用される鯨の髭とは、「ヒゲクジラ」類の上顎から櫛のように生えた角質のことで、水と食物とを漉しわけるために生えているものである。

当時の日本では、金属バネの製造技術がまだまだ未熟であったので、非常に弾力性があり、加工しやすかったセミクジラの髭を用いた。

鯨の髭は、しなやかな反発力と人形を柔らかく動かす力がある反面、使用後の修理や復元に時間がかかる。また、髭の大きさには限界があり、動力として使用できる範囲が小さく、座敷からくりや文楽人形の眼や眉の動きなど、小型で木製のものしか制作出来なかった。

しかし、幕末明治期になり、金属バネを加工する優れた技術の職人が現れ、動力の問題は解決した。そして、真鍮バネを使った「弓射り童子」と呼ばれる、なんともいえない愛らしく優雅で、日本人の心の機微をつかんだ、からくり人形が生まれた。これは、のちの東芝の創設者となる、からくり儀右衛門（田中久重）が、「万年時計」（万年自鳴鐘）とともに制作したものである。また、大野弁吉によって「亀の盃運び」など、リアルな動きをする動物型のからくりも作られた。

このほか、科学的理論に基づいて作られているのが、「水からくり」や「砂からくり」である。水からくりによる「自動噴水器」は、平賀源内や大野弁吉たちによって作られた。また、砂からくりには、砂の動きによって人形が鐘叩きをするものなどがある。

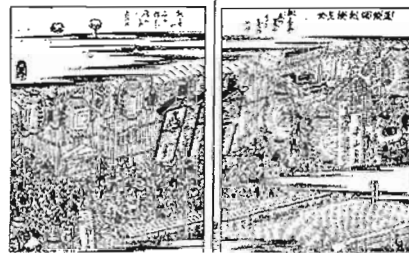
このように、当時の江戸の科学技術が、人形の世界において多く表現されていることは注目すべきところである。そして、その技術は、日本の開国とともに華開くことになる。しかし、一般商人の顧客のもてなしなどに利用されていた座敷からくり人形は、大きくて複雑化した楽しいものが作られるようになって、鹿鳴館時代（1883～87）には終止符を打つことになる。

竹田近江・出雲

寛文2年（1662）5月25日、大坂の道頓堀で、初めてからくり芝居が興行された。竹田近江少掾によるものである。

この初代竹田近江はどのような人物だったのか。その後百年、興行界に君臨した竹田一門とからくりとはどのような関係があったのか。名作「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」などの浄瑠璃作者として名高い竹田出雲は竹田近江とどういう関係にある

のか。竹田家は代々近江・出雲の称号を受けついでいったため、一門の系図はとりわけ分かり難くなっている。そこでひとまず重要人物のわかっている年代をあげてみる。



道頓堀の芝居（『摂津名所図絵』より）

初代竹田近江（清房）	？	— 宝永元年（1704）
二代竹田近江（清孝）	慶安2年（1649）	— 享保14年（1729）
三代竹田近江（清英）	？	— 寛保2年（1742）
初代竹田出雲（外記）	？	— 延享4年（1747）

二代竹田出雲（清定） 元禄4年（1691）－宝暦6年（1756）

寛文2年（1662）道頓堀ではじめてからくり芝居を興行した初代近江は、『京・大坂今昔芝居鑑』などによると、阿波の人、清房と称し、はじめ江戸で砂時計を工夫し、万治元年（1658）12月御所に召され、からくり人形を献上し、出雲を受領、翌2年5月再び受領して近江と改め、寛文2年大阪で竹田芝居の名代を許された、という。

この初代近江が子供の砂遊びから砂時計を発案したことは諸書に書かれているが、宝永2年（1705）刊の錦文流の『莫大門屋敷』によると、初代近江はゼンマイ仕掛の「時計からくり」の達人であったようだ。さらに『摂陽見聞筆拍子』の「竹田近江永代時計の事」によると、初代近江は、万年時計という昼夜の長短二十四節気をはじめ、日月五星の天体現象までをぎっしりつめこんだ実に精巧無比な時計を作っていたことが記されている。初代近江はもともと時計師であったようだ。その万年時計は歯車にいたるまですべて木製であったという。当時の人びとにしてみれば、この時計は神技にみえたことだろう。そしてこうした万年時計や時計仕掛を見世物にすれば、人が集まってきたに違いない。時計師竹田近江はここに目をつけ、時計仕掛のからくりを精を出したのであろう。

初代近江は寛文2年道頓堀で旗上げしてから延宝にかけての12年間、からくり一本で興行した。

初代近江のからくり芝居を継いだのが二代竹田近江清孝。このころの竹田からくりの出物が、多賀谷環中仙の『磯訓蒙鑑草』にあげられている27種目のからくりにもみられるようなものであったのだろう。すべてが時計からくりのように科学的なメカニズムをもったものであり、まやかしの仕掛ものもかなりあったと思われる。

この初代・二代近江が活躍していた元禄時代は、竹田家と拮抗するからくり座——とりわけ山本飛騨掾・伊藤出羽掾・宇治加賀掾の三座——があり、機巧の妍を競い、「からくり黄金時代」を築いた。

宝永2年（1705）11月、近松門左衛門の「用明天皇職人鑑」上演を機に竹本義太夫にかわって竹本座の座本として迎えられたのが竹田出雲である。この出雲という人物は、初代竹田近江の弟で竹本座の芝居主であった竹田外記と父子関係にあったといわれる。このときから浄瑠璃の世界に竹田一門の手によってからくりの技法が採用され、「用明天皇職人鑑」のほか「国姓爺合戦」などからくりを挿入した近松の操浄瑠璃の傑作がうまれる。

この初代竹田出雲に関する記事が正徳4年（1714）刊の『近世長老鑑』に書かれている。どういう仕掛であったかはわからないが、どうやら今日の扇風機の元祖を作っていたようだ。この初代出雲の子として二代出雲を襲名した清定は、「仮名手本忠臣蔵」などの浄瑠璃作者として名高い二代竹田出雲である。また二代竹田近江には後嗣がなかったので、初代出雲の子清英がこれを継ぎ、三代近江となった。つまり二代出雲と三代近江とは兄弟関係にある。

この三代竹田近江は近江大掾を受領し、芝居小屋を拡大した。こうして竹田家は近江が竹田座を、出雲が竹本座をそれぞれ牛耳り、竹田一門は独占的に繁栄をした。三代近江は享保16年（1731）に備前松平大炊守から招かれ、大掛りな旅興行をしたが、元文5年（1740）に受領した近江大掾披露のため翌寛保元年（1741）江戸下りをしたさいの興行がもっとも盛



竹田からくりの広告（浜松歌国『摂陽奇観』より）

大であった。このときは父初代出雲も同行し、派手に披露したので江戸の人気は湧立った。『我衣』に、そのときの様子が書かれている。この三代近江は翌寛保2年(1742)3月京都で披露興行をしたが、その年九月得意絶頂のとき夫婦そろって世を去る。

江戸の評判に気をよくした竹田芝居は十六年後の宝暦七年江戸に再度巡業し、翌宝暦8年(1758)『大からくり絵尽』三冊を発行した。画笔は西村重長。これをみると踊りと子供狂言をおりませた当時の「竹田からくり」がどんな出物を興行していたかがよくわかる。



これらのからくりがどのような仕掛であったかという、たとえば、「吹矢的なには扇」は子供人形に吹矢を吹かせ、最初は扇を吹きおとし、つぎに蠟燭の芯を吹ききらせ、さいごに燭台の棹の内から朝顔の骨組を組立て紙をはって火をともしというからくり。「天満神和合書始」は天神の人形が右手で桜、左手で梅、口で松の字を書き、つぎに唐子人形が逆さになり片手ずつはなして綱をたぐって向こうへ渡って梅の木の石台となり、梓の台も松の木の石台となるからくり。「枕返居合一手」は積み重ねた枕の上に足駄をはき片足あげて足をかため、居合を抜きながら枕を一つずつ蹴散らす細工。「福寿草笑顔春遊」は下の唐子人形が段々に重なって上の唐子が肩をはなれ、つってある房つき梯子に足をかけ、逆さにそり返り、太鼓を打ち、布袋人形も立ち上り、腹を打って拍子を合わせるというからくり。「胎内十月図」は60年前に竹田近江が工夫したからくりということで、子種がおり、子宮へ入り、初月から臨月まで毎月の形をあらわすからくりで、五月目から手足がでる。つづいて「万歳椎大力」では生まれた子供が指を折って歳をかぞえ、小便をしたりする。「三絃二挺鼓」では五歳で三味線をひき、十歳になると大力で梯子の上に同年くらいの子供をのせ、上の子供が軽業をしてみせるからくりで、これを最後のからくりとして終っている。

午前八時に開幕、全部で27種目を演じ、午後四時すぎに終演。これをみると、初代近江の堅実な時計からくりや写実性の強かったからくりとかわって、まやかしのものはさみ、人形の「放れ技」などをみせ、時代の嗜好に投じた傾向が知られる。高山の布袋台などにみられる「放れからくり」はこの後期竹田からくりの遺影なのであろう。ともかくこの頃から、竹田からくりは大向うを狙う奇工にはしり、本来の科学性を失っていった。

竹田家は三代近江の没後、弟平助があとを継ぎ、竹田・竹本・出羽・中の芝居を掌中におさめた。しかし人心はようやくからくりから離れていく。機械的な技巧より本当の人間の芸を見たいという欲求にかわり、歌舞伎に人気が集中し、からくり芝居の人気は急速に落ちていく。四代近江となった清一の代には竹田芝居はもはや挽回するすべもなく、明和五年(1768)近江大掾の名を他家に譲り、竹田座を投出する。また二代出雲没後その子文吉は三代出雲を名乗ったが、これも人気はなく、安永2年(1772)竹本座は解体する。以後、竹田

家は縫之助を名乗って、芸人としての竹田の名をようやく保つまでに落ち、ついに興行界の第一線から竹田の名は消えていくのである。

鶯や一声二ふし三ッの朝 竹田出雲

からくりの書

江戸時代当時、どのようなからくりが作られていたかを知るための、実に貴重な二冊の書物が残っている。

『拾珍御伽機訓蒙鑑草』 享保 15 年（1730）多賀谷環中仙著。販売元は著屋伝兵衛、大坂瀬戸物屋伝兵衛、江戸西村太郎右衛門。竹田からくりの仕掛けを解説した本である。この本は、独創的で奇抜なからくりに加えて、狡猾とも言えるトリックが取り入れられており、その歎しのテクニックは大いに楽しめる。

『機巧図彙』 寛政 8 年（1796）細川半蔵頼直著。板元は江戸の須原屋市兵衛。これは世界的に有名な本である。なぜなら、世界ではじめて時計の内部機構を解説した本だからである。からくりの基本として、はじめは時計の製作の仕方が解説されており、からくり人形の解説は、図解、寸法まで驚くほど詳細で正確に記されている。実際にこの本によって人形を作り出した人も多くいるようである。

著者の細川頼直は土佐の人で万象亭と号し、寛政の改暦のとき天文万作暦御用手伝に挙げられた。著者は本書を書き上げた直後に亡くなり、刊行を見ることができなかった。

以下、これらの書物から当時のからくりを紹介する。

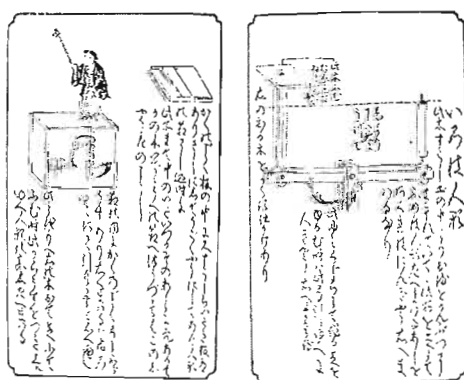
からくりの数々

「いろは人形」

人形は地面に立てられた柱の台に置かれているので、舞台のない見世物小屋で演じられていたらしい。人形はいろは文字のピラをつけた傘の下にあり、客が言う字のピラを采配で示



「いろは人形」(『機巧図彙』より)



「唐人笛吹」(『機巧図彙』より)

すのである。

図で示されるからくりはごく単純なものだ。これを動かすトリックは地面の下に埋められ

ていて、端が人形から離れた場所に出ている。術者はこの突起を密かに足で踏み、人形を動かすのである。

「一唐人笛吹」

人形の唐人が笛を吹くからくり。人形の台が管になっていて、楽屋にいる人が笛を吹くとその音が管を伝わって人形の笛から聞こえる。

「茶壺の水茶となるからくり」

茶壺に入れた水が、たちまち煮え立つ茶となる。釜には小穴が開けられていて、術者が口上を言っている間、釜の中の水を密かに革で作った管で、袖から袴を通して舞台の下へ流してしまふ。空になった釜をざい鉤にかけるのだが、このざい鉤はばらばらに見えて、実は一本の管になっている。天井から煮えた茶を注ぎ込めば水が茶になったように見える。

「天神記僧正の幸の術」

牛車に僧正が乗っている。牛を引いている子供と、車の周りには四人の随身の人形がついていて、浄瑠璃に合わせて車が進んだり、人形の一人一人が動くのである。

これは車の台の中に、十歳ほどの子供を入れ、仰向けに寝て口と手と足を使って、人形をいろいろに動かすのである。竹田からくりの術者は、いろいろ人形を移動させたりしながら、台の中には人などいないことを、さりげなく示していたものと思われる。

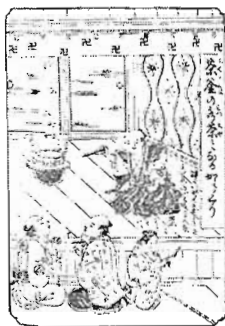
「人形文字を書くからくり」

この人形にはこれまでに紹介したような奇術的トリックはない。ぜんまい仕掛けで動くのである。人形の手は字板という板に従って動くという。

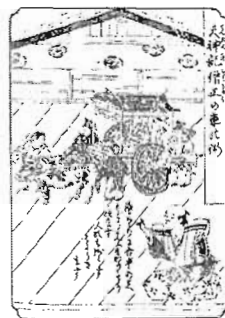
文字書き人形は不可能興味満点で、いろいろ作られたらしい。名古屋市有松町や富田町の秋祭りには文字書き人形の山車が出されている。

「三段かへりかるわざ人形」

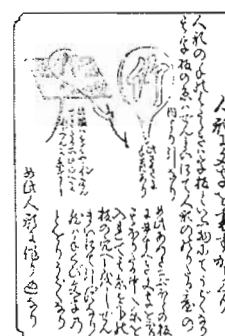
これは水銀を動力として使うからくりである。人形の胴体の中に水銀が入っている。この水銀が腹部にあると人形は立ち、腰に流れるに従って人形は仰向けになり、頭に移動すると逆立ちし、腹部に戻ると人形は立つ。



「茶釜の水茶となるからくり」(『機訓蒙鑑草』より)



「天神記僧正の車」(『機訓蒙鑑草』より)



「人形文字を書くからくり」(『機訓蒙鑑草』より)



「三段かへりかるわざ人形」(『機訓蒙鑑草』より)

以上が『拾珍御伽機訓蒙鑑草』のからくりの作品の一部であり、江戸時代に実際行われていたからくり見世物の演目例である。これらからくり師たちの奇想から生まれた二七種の作品は、読むだけでも十分に面白さを堪能することができる。

次に、『機巧図彙』からは、当時のからくりの製作方法を知ることができる。

「闘鶏」

箱の上に岩と梅の木を配した盆栽風の台に、童子を挟んで二羽の鶏が向かい合っている。童子が二羽の間に唐団扇を上げれば鶏が毛を逆立てて蹴り合い、左右に開く。鶏が蹴り合うこと三、四度にして岩の間より犬が出現する。鶏はこの犬に恐れて左右に飛び去ると、童子もいなくなってしまう。

この複雑な動きは砂からくりによって作られるというから驚きだ。これは添水というシシオドシの原理で、添水唐臼として唐臼をつく仕組みもある。砂筒に砂を入れたときの上下運動を糸や歯車で人形に伝えるのである。

「五段返」

前述の「三段かえりかるわざ人形」と同じからくりであり、人形の機構と製作法が図解されている。『拾珍御伽機訓蒙鑑草』とは格段の精度で解説されており、図解は一六ページにも及び、寸法や水銀の分量、小さな部品の一つ一つ、人形の衣装や収納する箱で段に作るなど、痒いところに手が届く丁寧さで解説されている。

この「五段返」は水銀を動力とするしかけであり、「闘鶏」は砂を動力とする仕掛けであるが、この書物で取り上げられているからくり人形の多くは、時計の応用である。『機巧図彙』は、全三巻のうちの首巻には柱時計、櫓時計、尺時計の工法に当てられている。そして、上巻と下巻に九種類のからくり人形が紹介されている。

機械のほとんどは木製であり、歯車は櫨の木と櫓を組み合わせて作る。ぜんまいやばねは鯨の髭を用いる。

では、時計仕掛けによって、人形はどんな動きを与えられたのだろうか。

「茶運人形」

人形が持っている茶台の上に茶碗を置くと人形が歩きはじめる。客がその茶碗を取ると立ち止まり、茶碗を戻すと向きを変え、元の主人のところに戻る。

井原西鶴もこの人形を見て驚嘆した一人であった。元禄五年（一六九二）『独吟百顔』に「茶をはこぶ人形の車はたらきて、江戸播磨、大坂の竹田、唐土人の智慧をつもりて、ぜんまい車細工にして、茶台をもたせておもう方へさし向いしに、口のうごき、足取のはたらき、手をのべて腰をかがむ、さながら人間のごとし」と書いている。

茶運人形は加賀の謎のからくり師、大野弁吉やからくり儀右衛門も作っている。

「龍門滝」

岩の間から流れる滝の置物である。この下に鯉を置くと、自然と滝を登っていき、滝の本で鯉は龍と化し、雲を起こして天に登る。

鯉の体内に鉄片が埋め込まれている。滝の裏には磁石があり、ぜんまい仕掛けで上に移動するにつれ、鯉も上に登る。鯉を客の手に渡しても、からくりはわからないのである。龍はばねで作り、縮めて小さくしておく。びっくり箱と同じ要領である。黒雲はあらかじめ煙草の煙を箱につめておく。

「鼓笛児童」

箱の上に座っている子供の人形が、鼓を打ち笛を吹く。

笛は人形の体内に仕込まれた風袋（ふいご）によって音を出す。鼓は箱の中のぜんまいによる。

「品玉人形」

当時流行していた品玉の奇術を人形に行わせようというのである。人形は枡を持っていて枡を上げると下に桃が見える。人形がこれに枡を伏せて再び上げると栗に変わっている。人形が枡を伏せる度に下の物が変化する。

一連の動きは全てぜんまいによる。人形が枡を伏せる部分の床が箱に作られていて、枡を伏せる度にこの箱が九〇度回転する。枡の中の品物は四とおりに変わるのである。

以上の座敷からくりは主人の手許を離れて動くので「離れからくり」とも呼ばれる。

おわりに

からくりについて知るにつれて、からくり見世物に対する興味が強くなった。そんなものが存在したことなど、始めは全く知らなかったし、現存もしない芸能である。それなのになぜ私はそんなにもからくり見世物に興味を抱くのか、始めは自分でも不思議でならなかった。しかしあるとき、はっと気がついた。私も江戸時代の人と同じだったのだ。「現代のからくり見世物」とも言える「からくり人形展」でからくり魅了されたからなのだ。

このレポートでの反省はたくさんある。何より一番残念なのは、文書の形で表現しなくてはならなかったことである。からくりの魅力を伝えるのに、実物を実際に見てもらうことに勝る方法は他にない。次に適しているのは、動く映像として見てもらうことだ。文章などは、最も不適切な表現方法である。百聞は一見に如かず。この授業と一緒に参加していた人たちには、是非とも大津祭を見に行ってもらいたい。この一言の方が、長々と書いてきたこのレポートよりも価値があるかもしれないくらいである。

この授業を通じて感じたのは、知っている(調べた)知識を発表することの難しさだった。自分には知識があるから分かることも、伝える相手の方には知識がないので伝わらない難しさ。百調べても、伝えるのは一しかない。という言葉も身にしみてよく分かった。そして文献を調べていて感じたのは、一番始めに研究を一から始めた人の大変さである。新しく出版された本には必ず参考文献としてあげられている本が何冊かあった。その本の著者たちは、実に偉大である。

やり残したこととしては、からくりの最高峰、「弓曳童子」の紹介ができなかったことである。はじめその構造を解説する予定であったが、難解な文字ばかりになるのでやめた。あとは、からくり見世物には、からくりそのものを見世物とするものと、からくり仕掛けのある人形でストーリーのあるものを演じるからくり人形芝居があったようである。この辺が、からくり見世物、という芸能が衰退してしまった理由に関係あるかもしれない。かなり最後の方になってやっと気づいたことなので、私にとっての今後の課題である。

〔参考文献〕

- 『からくり人形展』（朝日新聞社、1987年）
安藤君平ほか『人形考』（パロル社、1997年）
野中不二男『「からくり」の話』（文藝春秋、1993年）
福本和夫『からくり技術史話』（フジ出版、1982年）
泡坂妻夫『大江戸奇術考』（平凡社、2001年）
今津健治『からくり儀右衛門』（ダイヤモンド社、1992年）
立川昭二『ものと人間の文化史 からくり』（法政大学出版局、1969年）
峰崎十五『弓曳童子の再生』（峰工房、1998年）

〔コメント〕

許沢さんを虜にした「からくり世界」の魅力と、その素晴らしい世界をみんなに判って欲しい、何とか伝えようという彼女の情熱が、この小論を完成させたと云えよう。同時にその魅力をことばでもって綴ることの難しさ、自己の感動を客観的論理的に伝えるもどかしさも実感したであろう。「おわりに」でご自身が触れているように、この魅力溢れるからくり芸能が、時代とともに衰退していったという事実とその理由について、冷静に分析する課題が残りました。何はともあれ、百聞は一見に如かず、彼女を案内役にみんなで「大津祭」を見に行こう!!

（早島 理）